共愛学園前橋国際大学 公開講座　　2018年11月24日

20年先につなげる 外国人との共生

1. 在住外国人の数
2. 在住外国人及び日本人の抱えやすい問題
3. 問題の主な原因は「違いの気づきの有無」と「日本語力」
4. 多文化共生を進めるための考え方
5. 20年先につなげる外国人との共生

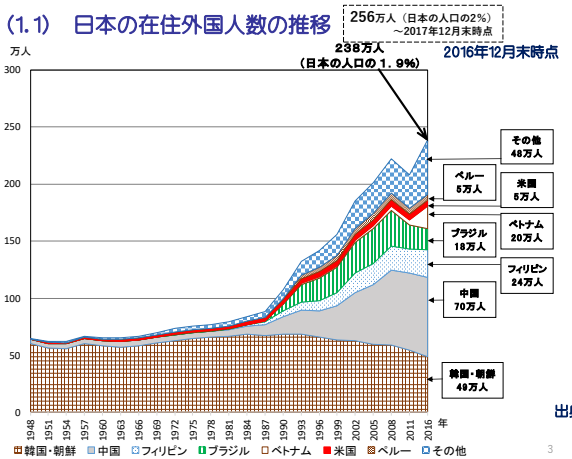
NPO法人 いせさきNPO協議会 社会貢献ネット
NPO法人 Gコミュニティ
代表理事　本堂晴生

1

1.　在住外国人の数

2

(1.1)　日本の在住外国人数の推移

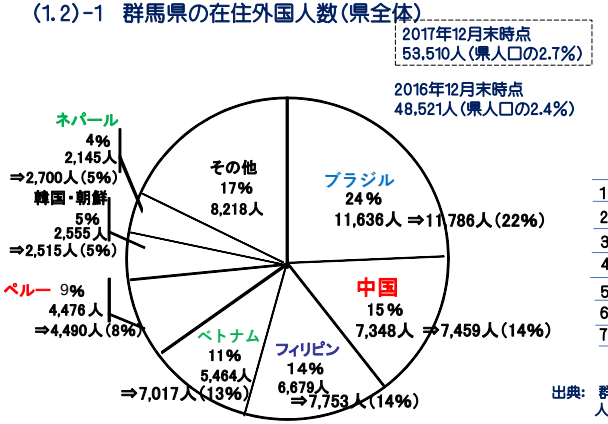


1990年の出入国管理法の改正で、多くの日系人が来日。

出典：　法務省出入国管理統計統計表

3

(1.2)-1　群馬県の在住外国人数（県全体）



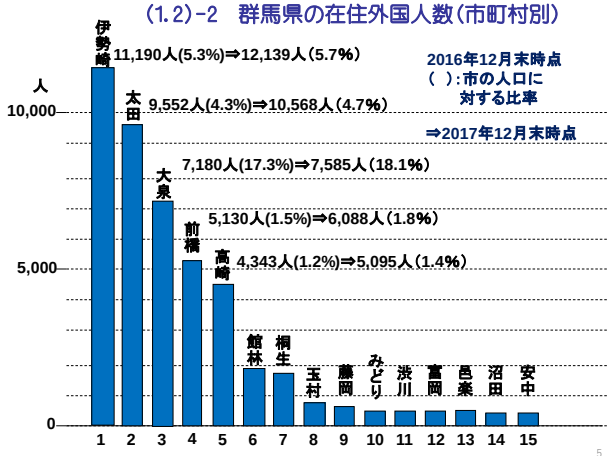
【国籍別　上位7か国】

	2016年	2017年
1	ブラジル	ブラジル
2	中国	フィリピン
3	フィリピン	中国
4	ベトナム	ベトナム
5	ペルー	ペルー
6	韓国・朝鮮	ネパール
7	ネパール	韓国・朝鮮

出典：　群馬県生活文化スポーツ部
人権男女・多文化共生課

4

(1.2)-2　群馬県の在住外国人数(市町村別)



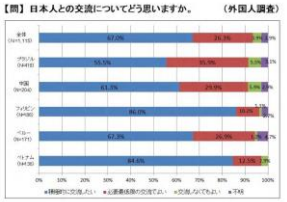
上位5自治体合計で全体の78%。

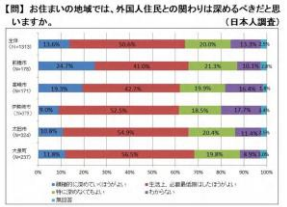
東毛(伊勢崎市、太田市、大泉町)と西毛(前橋市、高崎市)で、外国籍の構成が異なる。

出典:　群馬県生活文化スポーツ部人権男女・多文化共生課

5

(1.3)　群馬県住民アンケート調査(2016年実施)結果　【抜粋】





【問】 日本人との交流についてどう思いますか
(外国人調査)

⇒ 「積極的に交流したい」 67.0%
「必要最低限の交流でよい」 26.3%

【問】 お住まいの地域では、外国人住民との関わりは深めるべきだと思いますか。 (日本人調査)

⇒ 「積極的に深めていくほうがよい」 13.6%
「生活上、必要最低限はしたほうがよい」50.6%

外国人集住度の高い伊勢崎市(7.1%)、太田市(9.6%)、大泉町(6.8%)に対し、前橋市(24.7%)、高崎市(17.0%)と、2～3倍の差がある。

6

2.　在住外国人及び日本人の抱えやすい問題

7

(2.1) 外国人が日本の社会で生きていくために抱えがちな問題(大人の場合)

日本語力に起因する問題が多い。

日本語がよくわからない
～　仕事探しを派遣会社にまかせる

日本の生活習慣を学ぶ機会が少ない
～　日本人との付き合いが少ない

日本の税金・健康保険などの仕組みが難しい
～　将来を描きにくい

8

親が置かれている状況から起きやすい 親の抱える問題

貧困と教育の問題の世代間連鎖

- 日本語力の不足 文化・習慣の違い → 日本の社会制度をうまく利用できない → 孤立した家庭
- 派遣会社経由の不安定な就労 → 経済的に困窮した家庭 → ・学習塾に行く余裕がない ・進学の制限
- 両親が夜勤を含む共働き → 子どもの教育を考える余裕がない → 子どもが不登校・不就学、心理的問題を抱える

貧困と教育の問題の世代間連鎖

9

9

親の事情による移動から起きやすい 子どもが抱える問題

子どもの人生の将来の選択肢（進学、職業）がせまい

- 母国で生まれ途中で来日
  - → 日本語ができない → 不登校・中退
  - → 来日のタイミングが不適当 → 入学できない（不就学）
- 日本で生まれ日本の小中学校に在学
  - → 子どもは親に勉強を相談できない → 不登校・中退
  - → 自分のアイデンティティがわからなくなる → 親を尊敬しない・攻撃する、母国を蔑視
- 日本と母国を行ったり来たり / 日本で小中学校と外国人学校を行ったり来たり
  - → 年令相応の学力がつかない → 不登校・中退
  - → 日本語と母国語の両方が中途半端 → 考える力がつかない

11

11

（2.2） 外国人の子どもが日本の社会で生きていくために抱えがちな問題

日本語の読み書きが不充分
～ 学校の授業についていきにくい

親が日本の学校のことをよくわからない
～ 学校のことを親に相談しにくい

親を見ていても自分の将来を描きにくい
～ 日本の社会での選択肢が少ない

日本語力に起因する問題が多い。

10

10

（2.3） 日本人が直面する外国人との問題

① お互いに言語が通じない
- 相手に言いたいことがあっても伝えられない
- 相手を知ることができない

② 生活習慣の違いによるトラブル
- ゴミ出し、騒音、バーベキューの煙・におい
- 不法駐車

③ 文化の違い
- 個人の主張が強い

④ 日本人がしたとしてもあまり気にならないことを外国人がするととても気になる

⑤ 外国人との関わりでイヤな経験をすると、外国人を嫌いになりがち

お互いに関わりたくない傾向が強い。

12

12

3.　問題の主な原因は「違いの気づきの有無」と「日本語力」

～　小さな気づきから理解が始まる

13

13

(3.1)-1　各国の学校制度（義務教育）

日本の「あたりまえ」は各国では「あたりまえ」ではありません

…　「落第がない」、「4月はじまり」

：義務教育

国名	学校制度			落第	学校年度	授業時間
日本	小学校 6年	中学校3年	高校 3年	なし	4月～3月	全日制授業
ブラジル	初等学校 9年		高校 3年	あり	2月～12月	半日制授業
ペルー	小学校 6年	中学校 5年		あり	4月～3月	半日制授業
フィリピン	初等学校 6年	中等学校 6年		あり	6月～3月	半日制授業
ベトナム	小学校 5年	中学校 4年	高校 3年	あり	9月～5月	半日制授業
中国	小学校 6年	中学校3年	高校 3年	あり	9月～7月	全日制授業
韓国	小学校 6年	中学校3年	高校 3年	あり	3月～2月	全日制授業

注）・ 学校制度の「初等学校」などの呼び方は、国により異なります。上表では、便宜上、日本に似せた呼び方としました。
・ 授業時間は、同じ国の中でも学校により異なる場合があります。また、ペルーでは夜間部もあります。

14

それぞれの「当たり前」が異なる。

14

(3.1)-2　各国の学校生活（小中学校）

国名	部活動	運動会	給食	長期休業	授業参観	家庭訪問
日本	ある	ある	ある	宿題がある	ある	ある
ブラジル		ない	ある	宿題や登校日はない	ない	ない
ペルー		ある	ない		ない	ない
フィリピン	ない	スポーツ大会			ある・ない	ある・ない
ベトナム	ある	自由参加	小学校は学校食堂	宿題出すこともある	ある	
中国	ない	ある	ある		ない	ない
韓国	ある	ある	ある	宿題多い	ある	

注）・上記は公立学校での一般的内容。私立学校は異なる。空欄は不明。
・出典：外務省及び千葉県教育委員会のホームページほか

15

15

◆日本とブラジルでは学校生活での友だちのつくり方が違う。

日本	ブラジル
初めて入る場所ではこちらからはあまり話しかけず、まわりから話しかけられるのを待つ	こちらからどんどん話しかけて友だちになる
男子は男子、女子は女子の友だちの場合が多い	男子も女子もお互いに友だちになるのが自然
グループができやすい。「リーダー」がいる。グループの誰かが他のグループの嫌いな生徒と付き合うと仲間はずれのようにされることがある	グループでかたまることはあまりしないし、従って、グループのリーダーもいない

16

16

Aさん

ブラジルから来た女子が、日本の中学校の2年に入った。
自然のこととして「ブラジル流」でまわりの男子、女子に積極的にアプローチした。日本人の女子生徒たちから「あの子はなんなの！」と見られ浮いてしまった。
結局中退してしまった。

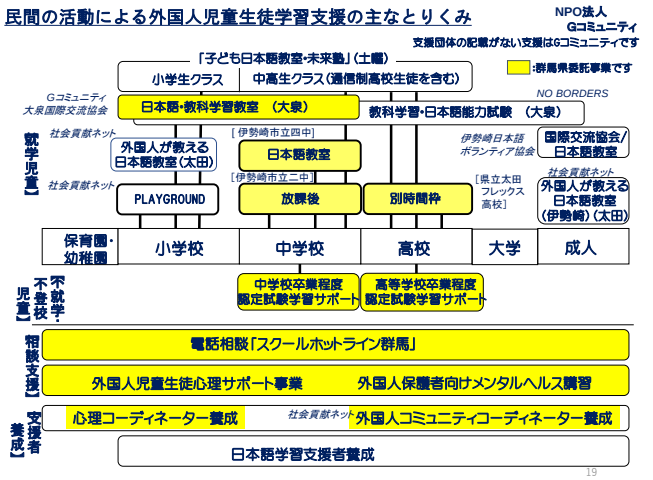
- もしまわりの大人がこの文化の違いを知っていて、事前に生徒たちに話をしていたら、もしかすると興味を持たれ「ブラジル流」が人気になったかもしれない。
違いがあることを少し知ることでお互いの違いについて考え、認め合うことになる。

多くの問題は、「違い」を知らないことから起きる。

17

17

民間の活動による外国人児童生徒学習支援の主なとりくみ



人生に寄り添う支援をする。
（必要に応じて）

19

(3.2)-1　地域のNPOの取り組み（NPO法人 Gコミュニティほか）

外国人の子どもにとって日本語を学ぶことは目的ではなく、自分の人生の選択肢を広げるための道具です

道具を使える環境づくり …　教育支援の広がり

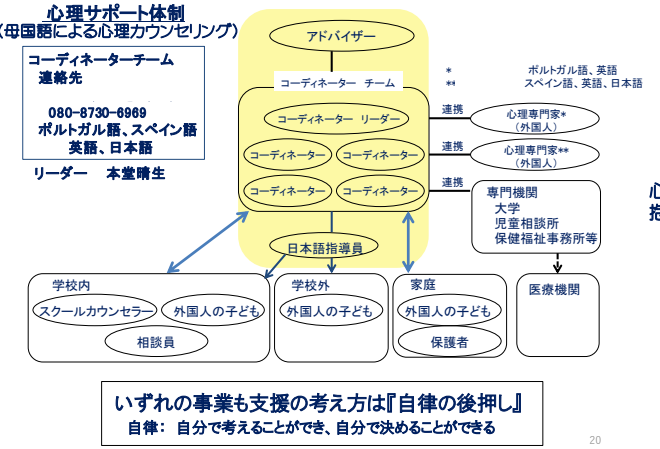
- 自分で考え・決められる力の養成
  - 進学説明会・職業説明会
  - 母国語による教育相談
  - 母国語による心理カウンセリング
  - 日本語・教科学習支援（学校内外）
- 機会を自分で作る力の養成
  - 中学校卒業程度認定試験の支援
  - 高等学校卒業程度認定試験の支援
  - 奨学金・教育ローンの情報支援
- 身近に相談できる地域の力の養成
  - 外国人コミュニティコーディネーター養成
  - 心理コーディネーター養成
  - 外国人が教える日本語教室（兼交流センター）

日本社会で一人一人の将来の選択肢を広げられることが共生につながる。

18

18

心理サポート体制
（母国語による心理カウンセリング）



心理的問題は、抱え込みやすい。

いずれの事業も支援の考え方は『自律の後押し』
自律：　自分で考えることができ、自分で決めることができる

20

20

4.　多文化共生を進めるための考え方

21

21

(4.1)多文化共生の発展

年月

第3段階　外国人から日本人に働きかけ

第2段階　外国人が地域の外国人を支援

第1段階　日本人から外国人に働きかけ

外国人が能力を発揮しやすい環境作りが大事。

日本社会で従来受け身になりがちであった在住外国人が、積極的に自ら日本人に働きかけることができることで、より対等な関係が構築され、外国人の持つ多様性が共生を通して日本社会や地域社会の新たな活力源になるのではないでしょうか。

私たちは、第1、第2段階に加え、このような多文化共生作りを目指します。

22

22

(4.2)在住外国人の増加に伴う地域の溝の拡大を予防する検討

概念	・多様性は良い ・違いを認め合う	… ここに賛同する人は多いだろう
制度	・社会制度 （税金、年金、健保他） ・教育制度	
生活習慣・文化		… 騒音・ゴミ出しなど生活習慣レベルの違いが溝を作る

生活レベルの溝が広がるままであると、多文化共生が足元から崩れかねない。

今後、外国人が増えるにつれて積極的に交流したいと思わない日本人との溝が顕在化するのでは。

これをポジティブなものに転化をさせる交流・考え方により問題を予防する

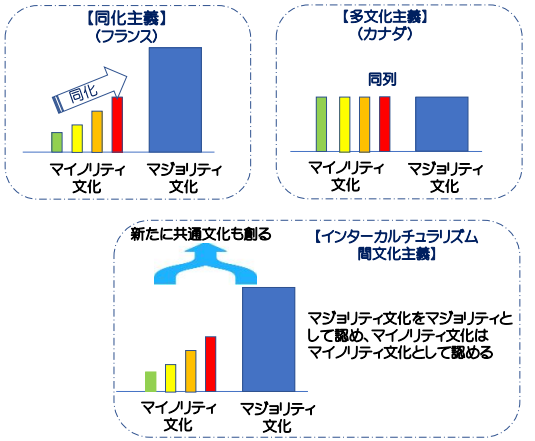
知識・情報の習得

体感する交流

23

23

(4.3)概念

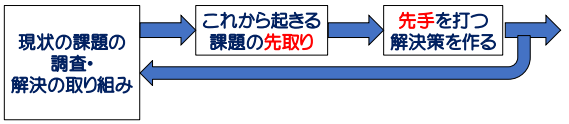


日本に適しているのはインターカルチュラリズムと思われる。日本のインターカルチュラリズムを作るのが良い。

24

24

（4.4）社会の変化のスピードが格段に速くなっていく状況で、
「先取り」「先手」をすることが、ひいては目の前の
地域課題の解決にもなる。



多文化共生は、現在及びこれからの
社会課題の解決の力になる

社会課題を解決する
力としての多文化共生

25

25

（4.5）共生をするための考え方

（4．5）-1　異なるものについて

相手と自分の違いを知り、自分の価値を認め直し、
相手と一緒に新しいものを作り合う

35人学級に1人異なる者がいて…

その1人を手間がかかり面倒だと扱う学級。
他の34人は、異なることは良くない、他人と同じであることが大事、と学ぶ　　（学級A）

その１人を、違いを比べて、自分の価値を認め直し、一緒につくり合う学級。34人は異なることは良いことだと学ぶ　　（学級B）

26

26

そして…

大人になって海外に出た時に…

学級（A）だった生徒は、海外では自分が異なる者になり、萎縮（いしゅく）。

学級（B）だった生徒は、海外で自分が異なる者になっても、ポジティブにとらえ活動する。

グローバル人材養成は、学校時代のありようからすでに始まっている

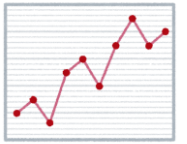
「グローバル人材」とは、
お互いの「異なる」を
認め合える人。

27

27

（4．5）-2　相手を知ることについて

「違い」が、差別につながっていくのか、それとも
自分を高めることにつながっていくのかの分かれめは、
相手を相手の価値観で知ることをすれば自分を高めることができ、相手を自分の価値観だけで見るならば差別につながっていく。



自分の価値観だけで見ることは
相手を知ることにならないから。

相手を相手の価値観で知ることは、多様なグローバル（地球）な世界で活躍する大事なカギ。

※「価値観」：良い、悪い、好き、嫌いの考え方

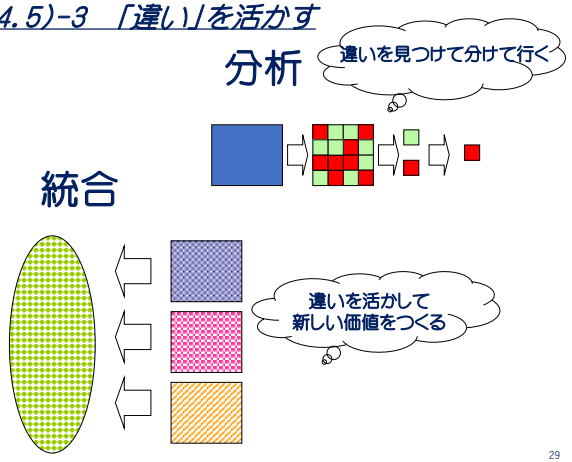
お互いの「当たり前」が
異なっていることを知る。
新たな共通の「当たり前」
を目指す。

28

28

28

(4.5)-3 「違い」を活かす



「分析」はこれからも重要な手法であるが、違いを切り捨てていく面があることに留意。

29

29

(4. 5）-4 討論について

何かを一緒に行うためであり、議論で相手を打ち負かすのが目的ではない

相手と自分の違いを知り、相手が納得するように説得する

自分の主張を通すのが目的ではない
主張を通しても相手が納得していなければ、実行の協力を得られない

相手の違いを理解し自分も変わる

多様性を活かすことができるようになる。

30

30

(4. 5）-5 YESかNOかについて

二つの意見を示しどちらか一つを選ぶことを迫るやり方は、一方を否定することになる

結果、否定された方は共感できず協力しにくい

相手をカタマリで見て否定する
例）だから日本人は。だから外国人は。

さきほどの「討論」と同じように、お互いの違いを知り、そこから新しいものをいっしょにつくることで全体が共感し、さらに進む

多様性を活かすことができる。

31

31

設問-1

「多様性」は一人一人が違う考え方や生き方を持っていることですが、
一人一人が違うとなぜ良いのでしょう

もし全員が自分と全く同じ生徒ばかりいるクラスだったら…

自分が変わる必要に気が付かない

32

32

「多様性」は一人一人が違う考え方や生き方を持っていることですが、
一人一人が違うとなぜ良いのでしょう

自分と異なる人がいることで
自分と比べて、自分の良いところ、良くないところを、考えることができる…　自分を高められる

また、相手の良いところを知ることができ、相手を尊重することができる

33

33

設問-2

「〇〇ファースト」「〇〇第1主義」って？…

1st（ファースト）
~~2nd（セカンド）~~
~~3rd（サード）~~

1st（ファースト）以外を否定するならば、その考え方は、
多様な1人1人を大事にしなくなる

1st（ファースト）
2nd（セカンド）
3rd（サード）

1st（ファースト）も2nd（セカンド）も3rd（サード）も違いを尊重し合うことで、協力し合うならば、
多様さから新しいことを創ることができるようになる

34

34

設問-3

外国人を支援していたら、ある日本人から「日本人にも困っている人が多くいるのだから、外国人よりも日本人を支援するべきでしょう？」と言われました。
あなたならそれにどう答えますか？

二者択一の問いで済ませてしまうのは、問題の解決につながらない。

どちらかしかないの？…
日本人を支援する人もいるし
外国人を支援する人もいる
困っている問題を解決するのが目的でしょう…

35

35

設問-4

あなたの家の隣に外国人が引っ越してきました。休日に庭でバーベキューをするのでにおいが自分の家に流れ込んでくるし、夜遅くまで庭で話をしていて眠りの妨げにもなります。
あなたならどうしますか？

相手の文化では　あたりまえのことをしている…

日本で暮らすのならばこうですよ、と教えてあげましょう

36

36

5.　20年先につなげる外国人との共生

37

(1)　なぜ「20年先」？

① 今の小学生～大学生が20年後、日本社会の中核人材になる
　⇒　多様性を認め合う教育が大事

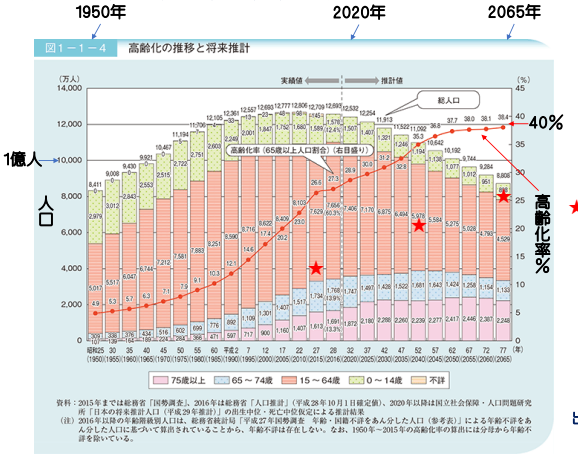
② 日本社会の課題　⇒　従来の延長では行き詰まる
少子・高齢化　　国と自治体の莫大な借金　　格差の拡大

③ 次の世代への責任　⇒　将来に向けた「投資」が必要

38

38

(2)　日本の人口推移と将来推計

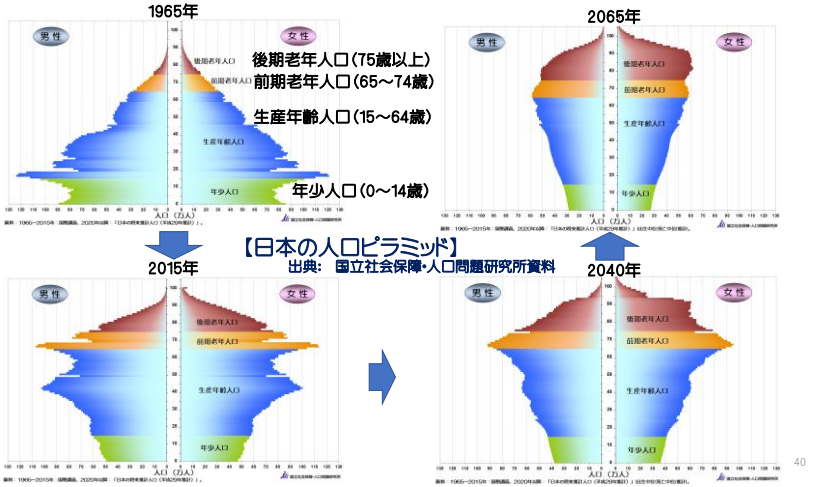


高齢化率の急増をともなう人口減少

「高齢化」は誰でもなること

出典：　国立社会保障・人口問題研究所資料

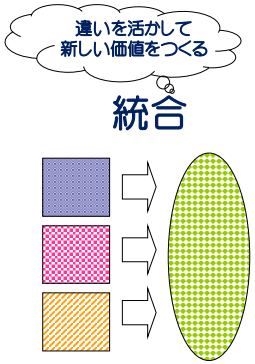
39



【日本の人口ピラミッド】
出典：　国立社会保障・人口問題研究所資料

40

（3） 少子・高齢化が急速に進む日本で目指す国の姿 ⇒ 「質の高い日本」



「質の高い」とは、「新しい価値を創造する」力が強いこと

対象分野:
例えば ・地球規模の生存にかかわること
・人と人のつながり作り

41

41

（4） 教育の力が外国人を20年先につなげる

教育の機会保障と教育費への 国・自治体・企業の投資
➡ 多様性を生かせる高技能人材の増加 税収＞社会保障費

幼児期 | 小学生 | 中学生 | 高校生 | 大学生 | 社会人

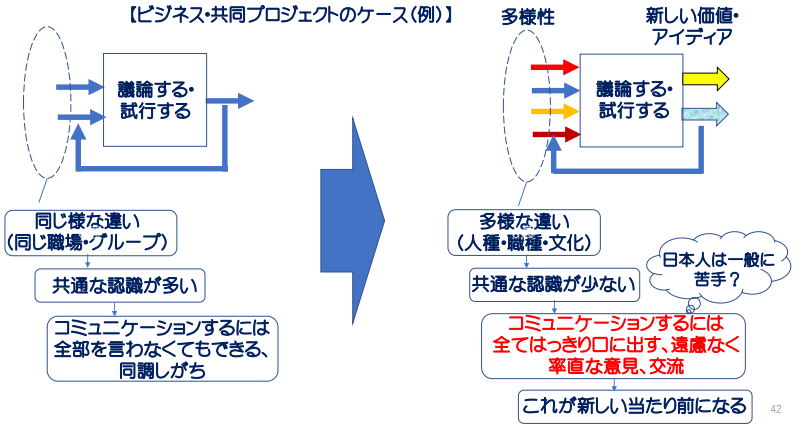
① 日本語学習 ⇒ 日本人と外国人のコミュニケーションが成立
② 教科学習 ⇒ 創造する力の習得
③ 家計の教育費負担の軽減 ⇒ 二人目、三人目の子ども可能

・企業も日本語教育の費用を拠出
・民間（NPO等）を活用した教育（日本語、社会制度）

43

43

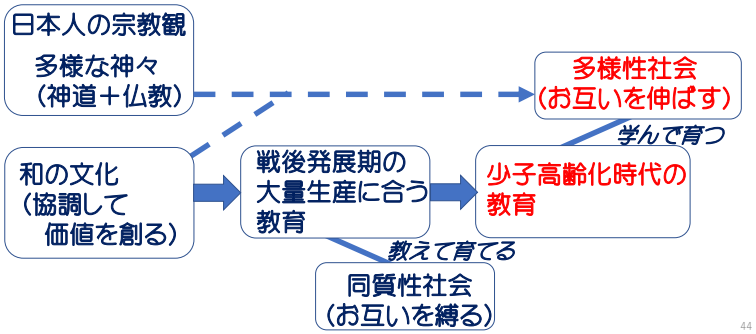
多様性が「新しい価値を創造する」力を高めるとは？



42

42

20年先につなげる日本社会の教育の発展



44

44

(5) 在住外国人により起こる問題

近所の生活での日本人との溝・トラブルの拡大

- 生活習慣

⇒ お互いの違いを知ることで、新たな「近助」になる

企業、不動産屋、自治体が行うようにすること:
- 雇用時・入居時に日本の生活習慣について説明する。
- 雇用後・入居後の生活相談支援

⇒ 企業、不動産屋、自治体、NPOの共同運営組織で行う

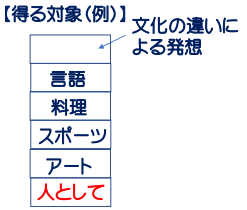
45

45

(6) 外国人が増加する時代の日本人に望まれること

① 多文化共生は受け入れ側の対応次第

- プラスになることを積極的に得ようとする姿勢。
  上から目線(見下す)では得ることができない。なんらかのリスペクトが必要。
- 待ちの姿勢ではお互いに分離のまま。



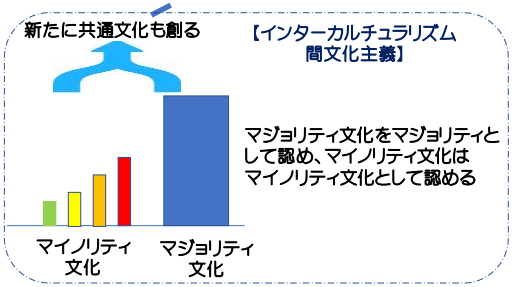
② お互いを相手の価値観で知ろうとすること

46

46

(7) 日本が進む多文化共生の形

多様性が「質の高い日本」をつくる



多様性を活かすには…

① コミュニケーションが成立すること:
⇒ 外国人の日本語習得

② 多文化共生は受け入れ側次第:
⇒ 日本人から関わろうとする姿勢

③ お互いを相手の価値観で知ろうとすること

47

47